

企画「歴史学と哲学の方法論的交差——感情史をめぐる」

犬を蹴るマルブランシュ 感情史から哲学史を見る場合

貝原 伴寛

感情の歴史研究は、重要な基本書の邦訳が続々と刊行された昨今、広く注目を集めつつある¹。ここではその基本的な考え方に触れてから、感情の歴史研究の立場から哲学史に接近するにはどうすればよいのか、という点について、ひとつの史料をもとに考えを述べてみたい。

感情史の大きな強みとして、感情を、時代を越えた普遍的な現象ともせず、個人の性格の問題に還元することもなく、社会的なものとして捉えることができる、という点が挙げられる。ブルデュー社会学の言葉を用いれば、感情のあり方は、社会的な「慣習」に則っており、日常生活の中で「実践」されることで会得され、身体化された「ハビトゥス」になる、というわけである²。この発想に基づく感情史の分析概念として、「感情様式」(emotional style) というものがある。ひとにはそれぞれ感情のスタイルがあり、それが振舞のパターンをつくるのだ、という考えのことだ³。「様式」とは便利

1 ウーテ・フレーフェルト『歴史の中の感情 失われた名誉／創られた共感』櫻井文子訳、東京外国語大学出版会、2018年。ヤン・プランパー『感情史の始まり』森田直子監訳、みすず書房、2020年。バーバラ・H・ローゼンワイン&リッカルド・クリスティアーニ『感情史とは何か』伊東剛史・森田直子・小田原琳・館葉月訳、岩波書店、2021年。また簡便な動向論文として以下がある。森田直子「感情史を考える」『史学雑誌』125巻3号、2016年、39-57頁。

2 Monique Scheer, “Are Emotions a Kind of Practice (and Is That What Makes Them Have a History)? A Bourdieuan Approach to Understanding Emotion”, *History and Theory*, Vol. 51, 2012, pp. 193-220.

3 Benno Gammerl, “Emotional Styles – Concepts and Challenges”, *Rethinking History*, Vol. 16,

な言葉で、家具について「ルイ 16 世様式」というように、時代固有のパターンを「様式」と呼ぶこともあれば、野球選手の「投球スタイル」というように、個人レベルでのパターンを指すこともできる。つまり、ジェンダーや社会層に固有の振舞の規範（エートスと言い換えてもよいだろう）と、個人の習慣とを、連続的に捉えることを可能にする概念である。では、この「感情様式」という言葉を使えば、何が見えてくるのだろうか。哲学史のエピソードを手がかりに考えてみよう。

時はルイ 14 世時代、場所はパリ。登場するのは二人の高名な哲学者。ニコラ・マルブランシュ（Nicolas Malebranche, 1638-1715）は、デカルト思想をキリスト教神学と融和させることを目指したオラトリオ会士で、17 世紀哲学史を締めくくる思想家のひとりである。主著『真理の探究』は 1674 年の初版以後大きな反響を呼び、論争を通じて改訂を重ねた、形而上学の大著である。対するベルナル・ド・フォントネル（Bernard Le Bouyer de Fontenelle, 1657-1757）は、『世界の複数性に関する対話』ほか、文学と哲学と科学に関する多くの文章を遺した著述家だが、哲学史においてはマイナーな人物である。むしろ科学行政に深く関与した人物として、また女性が主催するサロンで活躍した文人として、科学史やジェンダー史など、比較的新しい分野で再発見された人物である⁴。この二人に関して、以下の逸話がある。

フォントネル先生はある日このように語った。サントノレ通りのオラトリオ教会までマルブランシュ神父を訪ねたとき、そこで飼われている、身ごもった大きな雌犬が、お二人が散歩されていた部屋の中までやってきて、マルブランシュ神父にすり寄って、その足元にゴロンと転がった。追い払おうと何度か試みても動く気配がないので、哲人が足で強烈な一撃を加えると、雌犬は痛みから悲鳴をあげ、フォントネル先生は同情心から悲鳴をあげた。「おや、何ですか」とマルブランシュ神父は冷ややかに言った。「ご存じないのですか。これは何も感じないのですよ（cela ne sent point）」⁵。

この逸話は、1757 年にフォントネルが 99 歳の高齢で大往生を遂げた際に、友人のト

No. 2, 2012, pp.161-175.

4 Cf. 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」 フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会、2011 年。

5 *Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de Mr. de Fontenelle [...] par Mr. l'abbé Trublet*, seconde édition, corrigée & augmentée, Amsterdam, Marc Michel Rey, 1759, pp. 115-116.

リュブレ神父 (Nicolas Trublet, 1697-1770) が著した伝記のなかに記されたものであり、以後マルブランシュの性格を伝える面白い逸話として何度も引用された。しかし当初の文脈は少し違う。マルブランシュは、デカルトが『方法序説』で述べた仮説、すなわち言語と省察能力を欠く動物は自動機械に等しく、靈魂を持たない、という「動物機械論」を、『真理の探究』で積極的に擁護していた⁶。彼の頑固なデカルト主義を揶揄しながら、「体系精神」とは縁遠いフォントネルの精神の柔軟さを示すことが、この逸話の主眼である⁷。

それにしても、おそらく尻尾を振りながら、構って欲しくて寄ってきた飼い犬、しかも妊娠している雌犬を、強く足蹴にするなんて、なんと残酷だろう。そう現代の読者なら思うに違いない。しかしそのような解釈は、この逸話が流布した18世紀においては、必ずしも自明ではなかった。実は、飼い犬に対して暴力を振るう、という仕草が、「残酷」(cruel)だ、「野蛮」(barbare)だ、と言われはじめたのは、まさにこの逸話が刊行された18世紀中葉以後のことである。書簡形式の感傷小説が流行して、犬との情緒的な関係性が称揚され、凶像のなかで犬の愛らしさが強調されはじめたのも、この頃である⁸。トリュブレの伝記の出版に先立つ1753年には、仔犬に授乳する母犬の姿を情感豊かに描いた動物画家ウドリの作品が、絵画展で大きな反響を呼んだばかりであった⁹。逆に言えば、マルブランシュとフォントネルが生きた時代には、犬を蹴ることが、即座に倫理的な問題として認識されるわけではなかった、ということである。むしろ、動物に対する憐憫は、「弱さ」として捉えられかねなかった。例えば、少し時代は遡るが、モンテーニュは16世紀後半に、ニワトリが屠殺される光景や、ノウサギが自分の猟犬に捕獲される光景に不快感を覚えてしまう自分の傾向を「軟弱

6 動物靈魂論争は思想史の伝統的なテーマであり、文献は数多い。日本語で読める概説書、ならびにマルブランシュ時代の状況を簡潔にまとめた序論を含む研究として以下を挙げておく。金森修『動物に魂はあるのか 生命を見つめる哲学』中央公論新社(中公新書)、2012年。Jean-Luc Guichet, *Rousseau, l'animal et l'homme. L'animalité dans l'horizon anthropologique des Lumières*, Paris, Cerf, 2006.

7 動物靈魂に関する両者の見解の相違は、伝統的な哲学史においては等閑視されてきたように思われる。Cf. Joseph Beaudé, « Fontenelle et Malebranche », dans *Fontenelle. Actes du colloque tenu à Rouen du 6 au 10 octobre 1987*, Paris, PUF, 1989, pp. 369-378. なお「体系精神」(esprit de système)は、18世紀の経験主義者がデカルト主義を戯画化して批判する際の常套句であった。Cf. Jessica Riskin, *Science in the Age of Sensibility: The Sentimental Empiricists of the French Enlightenment*, Chicago, The University of Chicago Press, 2002.

8 18世紀における動物表象の変化に関しては以下の概論がある。Kathryn Shevelow, *For the Love of Animals: The Rise of the Animal Protection Movement*, New York, Henry Holt, 2008.

9 以下で閲覧可。https://utpictura18.univ-amu.fr/notice/9242-lice-allaitant-six-petits-oudry

さ」(mollesse)と形容している¹⁰。歩くのに邪魔なら犬を蹴っても良いのか。この問題には、動物に対する憐憫の社会的意味付けがかかっている。つまり憐憫を良しとして、可哀そうな犬が惹起する憐憫を抑え込まない感情様式と、人間の動物に対する霊的な優位性を確信し、動物に対する憐憫を抑え込んで殺す感情様式とが、小さな逸話のなかでぶつかり合っている¹¹。

フォントネルがトリュブレのような知人にこの話を語って聞かせたのは、無抵抗の動物を足蹴にして憚らない態度を戒め、むしろ動物に憐憫を抱くことこそが正しい、と暗黙裡に示唆するという、論争的な意図があったのではないか。少なくともトリュブレは、そうした意図を汲んだらしい。以下は上記の引用部に続く段落である。

私はフォントネル先生に言った。「今のお話 (conte) は、マルブランシュ神父と、氏の断固たるデカルト主義を忠実に描いた絵のようですね。」そして私は冗談で付け加えた。「同時に、先生ご自身の絵でもある。先生の善良さ (votre bon naturel) の証ですよ。この可哀そうな雌犬 (pauvre chienne) が足蹴にされるのを見て感じられた痛み (peine) に、私も感化されました (édifié)。痛み (douleur) の叫び声を理由に、この犬は感じる [能力を持っている]、といみじくもご結論なさったように、私としても、先生の同情 (compassion) の叫び声をもって、先生ご自身もまたお感じになる [心がある] のだ、と結論したいところですね。獣には魂 (une âme) があるとか、あなたには心 (de l'âme) があるとか、わざわざ口に出して言う必要があるものですかね。事実からして自明ですよ。」フォントネル先生はこのちょっとした冗談を上機嫌でお聞きになると、ただお笑いになるだけだった¹²。

油断して読むと、ああやっぱり、犬を蹴るなんてひどいよな、と得心し、丸め込まれてしまうようなテキストだが、注意すべき点は多い。まずトリュブレは、フォントネルの語る内容を「お話」つまり機知の効いた創作として受け取っている。したがってマルブランシュが本当に犬を蹴ったのか、という点について、事実性は担保されてい

10 モンテーニュ『エッセー』第2巻第11章「残酷論」を参照 (邦訳多数)。

11 19世紀イタリアの裁判沙汰を例に、異なる感情規範が衝突する場を「感情のアリーナ」として概念化した研究が想起される。Mark Seymour, "Emotional Arenas: From Provincial Circus to National Courtroom in Late Nineteenth-Century Italy", *Rethinking History*, Vol. 16, No. 2, pp. 177-197.

12 原文では最後の一文前で改行されているが割愛した。Mémoires..., p. 116.

ない。この逸話を信じるなら、マルブランシュは飼い犬が寄ってきて離れないほどに懐かれているのであって、普段は犬に対して優しく接していたかもしれない。もしかしたら蹴っていないかもしれない。頑迷なデカルト主義者なら、これくらいのことは良識に反してでもやりかねない、という主張をするための、修辭的な装置に過ぎないかもしれない。しかし問題はそこにはない。むしろトリュブレがこの逸話から道徳的教化を受けており、しかもその内容がむしろ、フォントネルの感情を肯定的に評価する価値観に基づいている、という点の方が重要である。

トリュブレが従う感情規範は、語彙によく表れている。足蹴にされる犬は「可哀そう」であって、その「痛み」は機械的な反応ではなく、「同情」を喚起するに足るひとつの感情である。逸話は動物に魂があることの証だけでなく、この動物に同情する者が「心」(de l'âme)を持っていること、つまり心優しい「善良さ」を秘めていることの証でもある。面白いことに、逆に考えれば、犬を足蹴にしても何も感じない人間は悪人である、という帰結が得られるはずが、トリュブレはそう明記しない。要するにトリュブレは、フォントネルの意図を汲んで、動物に対する憐憫を道徳的善性と結びつけて擁護しつつも、動物の痛みに対する無関心を「残酷」だと言って積極的に批判することはしなかった。動物に対する残虐性が不道徳性の証とされ、これを防ぐために法的罰則を設けることまで議論されるようになるのは、18世紀後半以後のことである¹³。犬を蹴る行為に対する義憤を示すことなく、あくまでも「冗談」として自己の解釈を提示するに過ぎないトリュブレの言葉は、妙に煮え切らないように見えるかもしれない。しかし彼が、動物に対する憐憫の社会的意味が「軟弱さ」と「善良さ」の間で揺らいでいた18世紀中葉という時代に、この文章を書いていたのだと気づけば、この煮え切らなさは、当時まだ支配的だった感情規範に対する折衝の姿勢だったのだと推察できる。

さて、もし哲学史が学説の推移を研究することに尽きるのであれば、ここで取り上げた逸話に大きな意味はないだろう。マルブランシュにせよフォントネルにせよ、哲学者の見解を知るには著作を丹念に読解するべきであって、こんな悪口まがいのエピソードは本質的ではない、と思われるかもしれない。

しかしデカルトの「動物機械論」のような特定の学説が、社会のなかに現れて受容されていく歴史的な過程を知ろうとすると、マルブランシュが犬を蹴った、という

13 18世紀末にブリテンで動物保護法制が始動したことは Shevelow 前掲書が述べる通り。19世紀中葉まで法制化が果たされなかったフランスでも、動物保護論は革命期に活発化した。Cf. Pierre Serna, *L'Animal en République, 1789-1802. Genèse du droit des bêtes*, Toulouse, Anacharsis, 2016.

話をフォントネルが吹聴し、トリュブレが独自の解釈を加えながらそれを出版物の中で公開した、という一連の流れは、動物機械論という伝統的な哲学史の論題を、より広範な文化史に繋げるための手がかりを与えてくれる。デカルトの学説が、犬に対する憐憫の是非という感情の問題に引きつけられるように、学説はときに、いやしばしば、その正否だけで評価されるのではなく、諸々の社会的な意味、ラベル、レッテルを付与されて語られる。論争においては、諸家が、そうした社会的意味付けの過程に参加しながら、自説を通し、異説を除こうと狙うことが少なくない¹⁴。本論で行ったささやかな逸話分析からは、この論争的な仕草を理解するために、感情史の方法が役に立つのではないか、という示唆が得られる。感情の歴史研究の方法を応用することで、犬を蹴るといった仕草、ある者にとっては些細で、他の者にとっては重大な仕草を、歴史的文脈のなかに位置づけられるようになる。つまり、哲学者にまつわる、一見すると無意味なエピソードに、歴史的な意味を見出すことが可能になる。そうすることで哲学史を、社会と文化の歴史に架橋できるのならば、さぞ面白いことではなからうか¹⁵。

14 「スピノザ主義者」や（啓蒙期の）「フィロゾフ」など、思潮を指す概念は往々にして、論争相手が勝手に作り上げたレッテルとして生まれる、という点が想起される。Cf. Antoine Lilti, « Comment écrit-on l'histoire intellectuelle des Lumières ? Spinozisme, radicalisme et philosophie », *Annales. Histoire, sciences sociales*, 2009/1 (64e année), pp. 171-206; *id.* *L'Héritage des Lumières. Ambivalences de la modernité*, Paris, EHESS-Gallimard-Seuil, 2019, pp. 223-257.

15 マルブランシュとフォントネルの逸話は、18世紀初頭における人と動物の関係性の変化の一局面として読むこともできそうである。この動物史的な状況については以下の拙論を参照されたい。貝原伴寛『猫の大虐殺』を読みなおす 十八世紀フランスにおける人と猫の関係史『思想』2020年9月号、92-115頁。同「猫の啓蒙 モンクリフ『猫』における猫愛好の擁護と顕揚」『年報 地域文化研究』第24号、2020年度、1-18頁。